# 図書館にいるあの子

A

放課後の図書館に、いつも君がいた。その子は、かみの毛をいつも一つ結びにしていて、長さはこしぐらいある、同級生の静菜(しずな)ちゃんだった。静菜ちゃんは、二年生のとある冬から一切学校にはこなくなっていた。

私は、静菜ちゃんのことが気になり、図書館で働いている人に聞いてみた。

「あぁ、いつもここに来てくれる、あの女の子ね。私もよくは知らないのよ。まあ知っていることといえば、その女の子は毎日来るわ。雨でもね。だいたい午前十時～午後五時くらいは静かに読書してるわ。」

私はそれを聞いてびっくりした。午前十時～午後五時くらいってことは、約七時間も静かに読書してるの!?あきないのかなあ…。

ますます静菜ちゃんのことが気になった私は、放課後に図書館に行ってみることにした。ばれないように入り口の近くにあった、少しぶあつい本をとって、本を読むふりをした。

あまりにも静菜ちゃんが本に集中しているので、ひまになった私は、少しぶあつい本を読んでみた。私はふだん本は読まないんだけど、この本はストーリーがめっちゃ好みだったから、思わず本にぼっとうしてしまい、静菜ちゃんを見ることをすっかりわすれてしまった。

三十分後に、静菜ちゃんを見るのを思い出した私は、三十分前に静菜ちゃんがいた場所を見てみた。

「あれっ!?いない!?」

思わず小さな声で口に出していた私は、急いで口を手でおさえた。周囲を見ると本を読みおえたのか、静菜ちゃんが本を選んでいた。私が口に出していた言葉は聞こえていなさそうだ。

すると、静菜ちゃんがぶあつい本をとって、本を読んでいたところにもどっていった。そのぶあつい本は確か、私が四年生のころに本の題名が印象的で、その本を開いてみたら、文字がぎっしりつまっていて、絵が一切なくて、読む気がなくなった本だ。

静菜ちゃんは、そんな本も読めてすごいなあ。と思っているとふと、あることに気がついた。それは、静菜ちゃんが本を読んでいる最中、思い出にひたっているような、でも悲しそうな目で、まどから見える青い空をじっと見つめていた。

そこで私は、静菜ちゃんが学校に一切こなくなったあの冬の日に、なにかとても悲しいことがあったのだろうと思い、静菜ちゃんと仲がよかった同級生にこのことを、明日聞いてみることにした。

今日はいつもより早く起きた。静菜ちゃんと仲がよかった同級生に、静菜ちゃんのことを聞くためだ。あの子は朝早くから学校に行っているはずだから、人が少ない朝に聞くのが一番だろう。だから、朝食も着がえも早くすまして学校に行った。

学校につくと、やっぱり静菜ちゃんと仲がよかった子がいた。なので、静菜ちゃんはなぜとつ然学校に来なくなったのか、なぜ図書館にいつもいるのか、その子に聞いた。すると悲しそうな目で、

「静奈ちゃんのことね。あの子はね…、二年生の冬に、お姉さんが交通事故で…。」

それ以上は聞かなくてもわかった。今日のじゅ業は頭が、静菜ちゃんのことばかりで頭に入ってこなかった。

放課後になると、急いで家に帰って図書館に行った。周囲を見ると、やっぱり静菜ちゃんがまどぎわの方にいた。私は静菜ちゃんの方に近づいて言った。

「静菜ちゃんって、二年生のころにお姉さんが交通事故で…、なくなったんでしょ？」

すると静菜ちゃんは、びっくりした目で私を見つめてきた。

「私もつらくて、悲しい気持ちになるの、わかる。だって私も三年生のころに、いままでずっと一緒だった愛犬のミルが朝起きたらとつ然、天国にいっちゃってたんだもん…。だから、ミルの分も楽しもうと思って、いろんなこと楽しくやってる。静菜ちゃんのお姉さんも、みんなと遊んだり、楽しく学校に行ってほしいんじゃない？」

私がそう言うと、静菜ちゃんは目になみだをためて、ニコッとして言った。

「そうね。私まちがってたわ。お姉ちゃんは、いつも私のことを気にしてくれた。このかみの毛もきれいだね。とか、一つ結びとってもにあうよ‼って言ってくれた。なのに…、そう言ってくれるお怖ちゃんはいない。けど、きっと近くで私のことを見ているわ。でも私が、お姉ちゃんが大好きだった図書館にずっといて、しかも学校にも行かないから…。お姉ちゃんは心配性だからね。でもお姉ちゃんには、安心して天国に行ってほしい。だから私、学校に行くわっ‼」

そして次の日になると、私と静菜ちゃんは、ランドセルをせおって一緒に学校に行った。その日は太陽が、いつもより温かく感じた。